

報告 核のゴミ捨て場「中間貯蔵」はいらない！10・28関西集会

「美しい自然を子どもや孫たちに引き継ぐのが、今を生きる我々の使命」

10月28日、「核のゴミ捨て場『中間貯蔵』はいらない！10・28関西集会」が、避難計画を案ずる関西連絡会の主催、コープ自然派京都の協賛で開催された。関電は昨年、中間貯蔵施設について、2018年中に県外で具体的計画地点を示すと福井県知事に約束。その期限まで2ヶ月と迫る中、白浜町にも高浜・おおい町にもどこにも造らせない、そのために運動の連携を強めていこうと、和歌山はじめ関西全府県、福井県から104名が集まった。

「核のゴミはいらん日置川の会」事務局長の冷水喜久夫さんと「ふるさとを守る高浜・おおいの会」の東山幸弘さんから地元での活動の状況等お話を伺った。活発な議論がなされ、熱気あふれる集会になった。



◆ゆたかな海・山・川を、白浜と同様に、若狭や全国の子どもや孫たちに残そう

冒頭、小山さんが主催者挨拶した。「核のゴミはいらん日置川の会」の設立総会では「ゆたかな海・山・川を子どもや孫たちに残そう。日置川に核のゴミ施設はいりません」とのスローガンが掲げられた。集会の目的・趣旨は、このスローガンを、若狭にもむつにも全国どこにもいらないという共有のものにすることだ。関電が期限までに計画地点を示せるかが焦点。特に福井県内では県議会での嶺南選出議員の発言等、差し迫った雰囲気が出ている。原発敷地内乾式貯蔵も永久の核のゴミ捨て場になることを若狭の人たちに知らせていこうと訴えた。

◆昔から残された豊かな自然を子ども孫たちに引き継いでいくため、全力を尽くしていきたい



冷水さんは、白浜町日置川地域での中間貯蔵施設立地をめぐる地元の状況や反対運動について、1958年の関電・殿山ダム放流による大水害への補償要求、日置川原発立地阻止という長年にわたる闘いの歴史を紹介しながら、以下のように報告された。

1976年、町が町有地を関電に売却し、原発立地問題が急浮上した。関電の工作により次々と町民が推進の方に向かわされ、推進・反対で町民が分断される厳しい状況が続いた。しかし、1988年の町長選で反対派の当選を勝ち取ることができた。これを受け関電は事務所をたたむと思ったが、以降も事務所を存続させ、今も社員が常駐している。今は主に民泊や教育旅行を行っている公社の活動に重点を置き、公社の社員と間違えるほど参画している。道案内や送迎をしたりしている。

福島原発事故以降、新規立地は無理だろうが、中間貯蔵を狙ってくる可能性もあり、絶えず動きを注意深く監視してきた。かつて和歌山県では5ヶ所の原発立地候補地があり、関電がそれぞれ土地を所有していた。日置川地域以外は全て町や民間等に売却した。しかし、日置川地域のみ、減らすどころか買い増している。関電とその関連会社は、日置川地域に現在、原発立地候補地だった口吸くちすいのほか、志原、名立なたちに合わせて約62haの土地を所有している。そのうち名立が最も心配だ。関電の中間貯蔵立地3条件(①良好かつ安定した地盤②十分な敷地面積③港湾施設がある)を満たし、関電にとって絶好の立地条件になっていると思われ、非常に強い危機感を抱いている。

このため、昨年より、学習会、町への要望書提出等、さまざまな取り組みをした。7月に日置川地域で「核のゴミはいらん日置川の会」を結成。8月には町内の残りの2地域で「核のゴミはいらん白浜の会」が結成された。県外の団体も申し入れを行った。これらの活動をしてきたことによって、町長は9月6日、町議会の所信表明で「受け入れない。協議もしない」と表明した。

町議会は保守系が多数を占めるが、9月に853名の署名で議会に請願書を提出した。今後は、11月末に講演会を開き、また、条例化に向けた運動を展開しようと話し合っている。

日置川地域は海・山・川を素晴らしい形で残している。これらの自然を子どもや孫たちに引き継いでいくのが、今を生きる我々の使命ではないか。このようなことを皆と相談する中で、「ゆたかな海・山・川を子どもや孫たちに残そう」というスローガンを作った。冷水さんは、このような使命や、福島原発事故では今も6万人が避難生活をしているという現実があるので、今後も造らせないために全力を尽くしていきたいとし、力強く話を締めくくられた。

◆敷地内乾式貯蔵は原発延命のためのもので認められない

東山さんは今年3月、避難関西が提起した白浜町宛要望書への賛同を福井県内の反原発団体に呼びかけられた。県内の反原発団体が使用済燃料の県外移設反対と主張することは、敷地内に置いておくことに繋がる懸念もある。しかし、県外移設の容認はプールが満杯になり運転不能という状況を変え、原発延命を助けることになるかと訴えた。この呼びかけで、県内の主だった団体の賛同を得ることができた。



次に、2000年代の小浜市への中間貯蔵施設誘致を阻止した闘い、若狭の原発の使用済燃料プールのひっ迫の実態について報告された。そして、使用済燃料をこれ以上増やさないため、原発を稼働させないこと、合わせて、国会での原発ゼロ法案の制定が重要だと訴えられた。

また、質疑の中で、敷地内乾式貯蔵に対する考えも述べられた。高浜町長は乾式貯蔵も選択肢と発言している。これについて「町長の発言は、プールから乾式に移せと言うだけのもので、使用済燃料を増やさないということではない。原発の稼働を止めない状況で、使用済燃料をどうするかという議論をすることは、原発延命に繋がる」と強調された。

◆和歌山・関西・福井の運動は連携し、年内計画地点が公表できないよう監視を強めよう

コープ自然派脱原発ネットワークより、8月に行った和歌山ツアー等の紹介がなされた。ツアーでは、各地の生産者と中間貯蔵について意見交換したこと、白浜現地を訪れ、冷水さん等と交流したこと、白浜町へ要望書を提出し、組合員のシール投票の結果等も伝えたことが報告された。

避難関西はこの間、福井や全国の団体と連携し、関電の中間貯蔵を止めるため、自治体等への申し入れを行ってきた。参加者より、9月のむつ市への申し入れで「関電の燃料は当面だけでなくずっと受け入れるつもりはない」、10月中旬の高浜・おおい両町への申し入れでそれぞれから「中間貯蔵・乾式貯蔵は受け入れない」との回答を得たことが報告された。

これらを受け、「高浜・おおい両町が受け入れないとの姿勢を守るよう、町民からも受け入れないと声が高まるのが大切。両町にチラシ配布に行こう」と提起がなされた。2010年秋、高浜原発でプルサーマルが強行される前の戸別訪問では、人々は皆、使用済MOX燃料の行き場がないことを知らされていなかった。「今や使用済ウラン燃料も行き場がないことが明白になっている。乾式貯蔵は永久の核のゴミ捨て場になると伝えていこう」と呼びかけがなされた。

最後に、どこにも中間貯蔵を造らせない強い意思を表明し、運動の連携を強めていくため、集会アピールを採択した。あと2ヶ月、福井県外の計画地点公表ができないよう監視を強めていこう。敷地内乾式貯蔵施設も永久の核のゴミ捨て場になることを原発立地地元の人たちに広く知らせていこう。約束違反状態に追い込み、原発の運転を止めよう。むつ中間貯蔵施設の操業を止めよう。

2018年11月3日 避難計画を案ずる関西連絡会